

今号の トピックス ネット依存傾向生徒に対する教師支援（指導）の実際的一端

ネット依存傾向の生徒に対して、教師がどのように支援（指導）しているかに関する貴重なデータを、群馬大伊藤研究室所属の大学院生が修士論文として明らかにした。伊藤教授にその概要をまとめて頂いた。（大谷）

依存傾向生徒への教師支援の調査

中国から群馬大学に留学している楊淇さんは私のゼミ生で、この度、日本と中国におけるネット依存傾向の生徒に対する校内支援（指導）に関する修士論文を書き上げた。

彼はその中で、日本の教師を対象としたネットアンケートを行っている。ご存じの通り、近年学校の先生は非常に多忙なので十分な数の回答が集まるか不安であったが、何とか400名の先生方に回答してもらえた。現在の学校でネット依存についてどのような支援（指導）が行われているかに関する調査は管見のところ見当たらず、これは貴重なデータといえる。

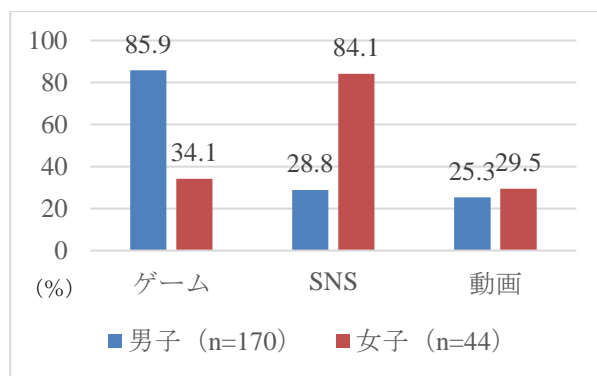
400名の内訳は、高校116名（29.0%）、中学132名（33.0%）、小学校152名（38.0%）、男女比は男性7割、女性3割である。ネット依存に関する予防教育（講演会、授業等）の1年あたりの回数を尋ねたところ、「1回」が48.5%、「2～4回」が28.0%、「5回以上」が3.0%、「やっていない」が20.5%であった。予防教育の充実度については62.0%の教師が「十分ではない」と感じており、「十分だ」と回答した教師はわずか8.5%にとどまっている。

生徒支援の経験ある教師は5割強

ネット依存傾向がある生徒を支援（指導）したことがあるか尋ねたところ、400名中219名（54.7%）が「ある」と答え、そのうち62名（15.5%）は5回以上あると回答している。指導しなかった教師181名にその理由を尋ねたところ、7割は「該当する生徒がいなかったため」としているが、「支援に関する専門知識が少ない」（12.7%）、「時間的な余裕がない」（11.6%）という回答もあった。

指導した生徒の性別について尋ねたところ（複数いる場合は「もっとも印象に残った生徒」について回答してもらった）、男子170名（77.6%）、女子44名（20.1%）、利用していたコンテンツ（複数回答）は

ゲーム163名（74.4%）、SNS87名（39.7%）、動画視聴56名（25.6%）であった。男女別に見ると、男子はやはりゲームが中心（85.9%）、女子はSNSが中心（84.1%）で、統計的にも有意な差があり（ χ^2 検定、1%水準）、以前から指摘されていたことが裏付けられる結果となった。



生徒が利用していたコンテンツ (%)

支援後の生徒の変化 55%前向き

支援（指導）の結果生徒の状態がどう変化したか尋ねたところ、「よくなった」は17名（7.8%）、「ある程度よくなった」は103名（47.0%）、「変わらなかった」は77名（35.2%）、「何とも言えない」が22名（10.0%）であった。

支援（指導）の困難と課題

指導にあたって直面した困難を複数回答であげてもらったところ、「時間的な余裕がない」82名（37.4%）、「生徒が意図的に逃避する」70名（32.0%）、「支援に関する専門知識が少ない」66名（30.1%）が上位3項目であった。

また、指導する際に、カウンセラーや養護教諭との連携がある場合は指導が上手くいくと答える割合が有意に高いことも示されている。

現代の教育環境が直面するさまざまな課題が示されてはいるものの、いくつかのヒントを読み取ることもでき、希望が見出せる調査となっている。